# 各キャンパス図書館めぐり

## コロナ禍の今だからこそ「図書」の力を！

農学部環境管理学科　准教授　早坂　大亮

平成から令和の時代に移り、早1年半が経過しました。「人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つ」という意味をもつ「令和」の時代を、私たちはどう生きるべきでしょうか？今年、私たちすべてにこのことを問いかけてくれる出来事がありました。「コロナ」です。

コロナの猛威は、私たちの生活様式も意識も180度変えるきっかけを与えました。いわゆる「パラダイムシフト」です。今まであたり前と思っていた人との触れあいが突然絶たれ、その影響は、一番大切な「家族」という単位にまでおよびました。私たちはいまも、コロナという「みえない脅威」に怯えながら生きています。他方で、今回の出来事は、私たちに「自分を見つめ直す十分な機会」を授けてくれました。これがなければいつものように、「刹那的であり、かつ従属的な生き方」を続けていたかもしれません。

私自身、オンライン授業への対応やさまざまな会議への参加など、むしろ「今の方が忙しいかも？」と思ったりもします。しかしそれでも、学生の入構もままならないため、自分を見つめ直す時間がフッとできたりします。「研究を始めて20年近く経ったが20歳の自分からどれだけ成長したのか？」とか、「今後自分の進むべき道をどこに設定すべきか？」と言ったことです。そのようなことを考えたときに、ふと、もう何年も前になくなってしまった私の恩師の一人の先生が書いた本を無性に読みたくなりました。その先生は、とても穏やかで怒った顔を一度も見たことがありませんでした。でも、質問に行くたび、鋭利な刃物で心臓をひと突きしてきます…。わたしの見識の浅さや洞察力のなさをつねに気づかせてくれる先生でした。とても怖くて尊敬できる先生でした。その先生が仰った「知の探究心だけは失うな」は、私の座右の銘となっています。とは言え、その先生が書かれたとある本だけは難解すぎて、大学時代の私には都合の良い睡眠導入剤でしかありませんでした（その先生が書いた他の本はまあまあ理解できたつもりです…）。でも、あれから20年、少なからずさまざまな経験をした今なら「イケるかも」と思い、読み直してみました。なんと15％くらいは理解できた気がするのです！その先生の思想がほんのちょっと共感できた気がする瞬間でした（でも、すべてを理解するためにはあと何十年必要なのだろう…。というより、理解できぬままあの世で、また先生の講義を受けるやもしれません）。こんな些細なことでも、自分がどれくらい成長できたかを「図書」と言うものは知らせ、気づかせてくれます。

数学や化学の場合、答えや思想（解き方・理論）はほとんど生涯変わることはありません。小学校時代に習った式や答えは、50歳、80歳になって解き直しても変わりません。しかし、「図書」と言うものは作者の思想を色濃く反映します。その場合、読み手の心や思考の成熟度合いによって、同じ文章でも、受け止め方が変わってきます。これは、小説やマンガに限らず、専門書にさえ当てはまります。これって、気づいてみるととてもスゴいことじゃないですか？だからこそ、「多様性のある社会」はつねに尊重されるべきなのです。

コロナ禍だからこそできること。絵本だって良いんです。この機会に、ホコリを被ったダンボールから、そっと「図書」を取り出して、読み直してみては如何ですか？きっと今の自分を気づかせてくれる羅針盤となることでしょう。「図書」、そして「活字」にはそんなすばらしい力があるのです。

# 『2020年度前期　コロナ禍の日誌』

**生物理工学部事務部　課長代理　伊豆田　幸司**

新型コロナウィルス感染症（以下、COVID－19）の世界的流行によって、当館においても様々な対応が求められ、我々図書館職員も感染症の蔓延を防止し、また制限された中でできる限り学修・研究が継続できるように努めた。

その様子を、簡潔であるが以下に記させていただくこととした。

2020（令和2）年3月18日（土）に保護者等の参列無しという異例の状況下で卒業式が行われて以降、当館でも換気、ソーシャルディスタンスに対応した閲覧座席の間引き、次亜塩素酸水（ハイター0.05％溶液）による机等の定期消毒といったCOVID－19対応を実施し、新学期に備えていた。

ところが状況はこれらの対応を遥かに超え、緊急事態の宣言に先立つ4月2日（木）に学生の入構禁止措置が発表、翌日より当館も臨時閉館に入ることとなった。慌ただしくWebsiteやUNIVERSAL PASSPORTに掲示をし、春休み中の貸出者の延長措置などもおこなった。また、返却日や入館について何本も電話での対応をおこなった。

この間、出版社のご協力による臨時的な電子図書のアクセス数増加のPRや宅配図書貸出サービスを開始するなど、学修・研究が少しでも継続できるよう対応した。

約二ヶ月の臨時閉館を経て6月8日（月）に開館することが決まり、久方ぶりに学生さんたちを受け入れる準備をおこなった。

当館では入館管理システムを導入していないため、入館の後にカウンターに設置してあるICカードリーダーで入館チェックをとることとした。その他前期中は、午前、午後1、午後2と三区分し、それぞれ30名までの入館制限・予約制で運用した。

使用する座席の指定はおこなわないが、入館時に札を渡してそれを自分が使用した机において貰う（定期的に館員がそれを回収・札が置かれた机を次亜塩素酸水で消毒する）アイデアで、館員の眼が届きにくい4階閲覧室への対策とした。

6月5日（金）には、他大学等の図書館などでも広く使用されているパーティション（飛沫感染防止用シールド）を図書館3階カウンターや大机などに設置した。「新しい日常」の風景が図書館にも出現したのである。

座席間引き、パーティション設置を施した3階閲覧室

9月12日（土）の後期開講より、学外者の利用など一部を除き通常時の利用に戻ったが、消毒対応や座席の間引き、パーティションなどはそのままである。これらが「日常」となるかどうか今も予断を許さない状況であるが、一日でも早く図書館を安心して利用して貰える日を期して、日々の業務に励む次第である。

## ハダーズフィールド大学図書館を訪れて

工学部教育推進センター　西尾　美由紀

イギリスの地図でちょうど真ん中に位置するハダーズフィールドにある国立大学、ハダーズフィールド大学の図書館は、キャンパスの真ん中に位置しており、学生が集うStudent Hubと同じ建物の中にあります。学生がとてもアクセスしやすい場所にあり、学生の出入りもかなり多く感じました。図書館は、2階から6階までの5つのフロアを使用しており、学生が使えるスペースもかなりあります。個人で静かに勉強したいときは、Quiet Study（下写真）で、グループでディスカッションしたい場合は、Group Studyを利用します。Group Studyは数人で使えるところから、30人くらいで授業もできる教室もあります。至る所にQuiet StudyやGroup Studyがあり、常に学生たちが集まってディスカッションしています。

授業で使う教科書は、複数（多いものだと10冊くらい）揃えられていて、すぐに購入できなくても、図書館で借りることが出来ます。教科書のほとんどは、オンラインで借りることが出来、非常に便利でした。必要な箇所は、枚数制限があるものの、プリントアウトもできました。各授業で提示されるリーディングリストや資料は、学生用のポータルサイトからアクセスでき、本や論文名をクリックすると、すぐに図書館のホームページに飛び、貸し出し状況も簡単に確認出来ます。教科書以外でも、オンラインで貸し出しできるものがかなりあり、コロナ禍で、大学の図書館も閉鎖されている間は本当に助かりました。

Quiet Study　1（パソコンも自由に使えます）

Quiet Study　2

下の写真は、本の貸し出しを自分で行う機械。タッチパネル式で、分かりやすく、スムーズに貸し出しの手続きが行えます。貸出期間を延長したいときも、このパネルから行えます。

工学部の図書館も、かなり電子書籍が増えてきましたが、授業で使う本，研究所などがもっとオンラインで閲覧できるようになると、さらに便利になると思います。

大学の規模が違うため、フロアの広さの違いはありますが，工学部の図書館も、グループルーム、個人で使えるスペースも十分にあるので、もっと学生たちが活用できるように、授業での課題の出し方、参考文献の提示など工夫していきたいと思います。

# 「挿絵解釈の楽しみ」
# －江戸時代の人々の認識を読み解く

産業理工学部教養･基礎教育部門　准教授
位田　絵美

## 1. はじめに

「挿絵を解釈する」と言われても、ピンと来ない方が多いのではないでしょうか。筆者は、江戸時代の文学（近世文学）を専門とする研究者ですが、近世文学の世界でも、絵本などのように絵を中心とする作品以外、解釈の対象は基本的に文章・言葉です。

しかし、現代のように情報があふれる社会ではなかった江戸時代では、版木に彫られた荒削りの絵の中に、我々が想像する以上の多くの情報が詰め込まれていました。挿絵は言葉以上に雄弁です。文字の読めない人々にも、一目瞭然に情報を提供できます。260余年も続いた江戸時代の間、パソコンやスマートフォン、テレビ等の情報収集の手段を持たなかった人々は、多くの情報を本の挿絵から得ていました。

今回、「香散見草」の原稿のお話を頂戴し、その一端をご紹介することで、ぜひ一人でも多くの方々に、「挿絵を解釈する」楽しさを知っていただきたいと考えました。

## 2. 仮名草子『異国物語』の存在

まず手始めに、江戸時代の早い時期に刊行された『異国物語』[1]をご紹介します。婦女子向けに刊行された仮名草子というジャンルの本で、難しい漢字には、ふりがながついています。

『異国物語』のタイトル通り、日本を含む138ヶ国（地域）の異国の人物を、1コマずつ描いて紹介する本です。成立は1658年頃で、当時の日本の人々が、異国（地域）や異国人をどのように捉えていたかが、この挿絵からわかります。

例えば、下の図1は、「高麗国」です。この絵には、当時の日本から見た先進国の証が、すべて描き込まれています。先進国の証とは、帽子をかぶり、長衣をまとい、靴をはき、手に扇を持っていることです。

一方で、現代の沖縄県にあたる「大琉球国」は、図2に示すように、それとはまったく反対の姿で描かれています。帽子をかぶらず、胸をはだけて脛が見えるような短い衣をまとい、素足です。手には葉っぱのようなものを持っています。

じつは、この図2は、『異国物語』よりも50年ほど前に中国で刊行された図説百科事典『三才図絵』[2]の影響を強く受けています。図3に、『三才図絵』の「大琉球国」の挿絵を並べてあげてみました。見比べると、両者がとても似通っていることがわかります。

いかがでしょうか。図3から、当時の先進国である中国から見た「大琉球国」の描き方

図1『異国物語』「高麗国」

図2『異国物語』「大琉球国」

図3『三才図絵』「大琉球国」

が、いわゆる発展途上国に対する描写に終始していたことが、はっきりとわかります。図2の『異国物語』は、その情報を、ほぼそのまま取り入れていることになります。

ここで注意しておきたいのが、1658年頃に日本で刊行された『異国物語』には、「大琉球国」が「異国」として掲載されていることです。後に薩摩によって武力で支配され、日本の国内として認識されていく沖縄は、じつは江戸時代前期の多くの人々にとっては、まだ「異国」として認識されていたことがわかり、大変興味深いです。挿絵に表れた当時の人々の認識を、垣間見ることができます。

### 3. 図説百科事典の存在

このように、言葉をつくした解説よりも、その画像を見る方がたやすく内容を理解できるという利点を最大限に活用したのが、図説百科事典です。江戸時代にも、多くの図説百科事典が作成されました。その1つに、寺島良安という医師が編纂した『和漢三才図絵』[3]があります。

『和漢三才図絵』は30年余りの月日をかけて編纂され、1712年頃成立しました。この本は、それより約100年前に中国で刊行された『三才図絵』の日本版（日本語訳）であると、長年言われてきました。しかし、両書を丁寧に比較すると、日本版の『和漢三才図絵』として編集される際に、中国の『三才図絵』にはなかった新しい多くの情報が、修正・加筆されていることがわかりました。それは挿絵にも及んでいます。

1例として図4に『和漢三才図絵』から「琉球国」をあげてみました。元となった図3『三才図絵』の絵と見比べてみてください。別の国かと思うほど、激変しています。

図1にあげた『異国物語』の「高麗国」人のような扇こそ手に持っていませんが、先進国としての証である帽子・長衣・靴がはっきり見てとれます。同じ『三才図絵』の情報を元にした1658年頃刊行の『異国物語』の図2と比べると、50年余りの間に、日本の人々の「琉球国」に対するイメージが、大きく変化したことが、この図4からわかります。

1712年頃成立の『和漢三才図絵』でも、まだ、「琉球国」は、「震旦（中国）」や「朝鮮」とともに、「異国人物」の部に収録されていますが、当時の日本から見た「琉球国」の存在は、「震旦（中国）」と同じように敬意の対象であったことが明らかです。

50年余りの時間が、中国経由の情報を鵜呑みにさせないだけの、独自の情報を、日本にもたらしていたと考えられます。

図4『和漢三才図絵』「琉球国」

### 4. 中国から見た「日本」と日本の自意識

じつは図説百科事典の挿絵を確認する限り、さまざまな情報が集積したはずの先進国中国における異国への関心は、明代（1368年～1644年）をピークに減退し、人物のイメージ像は画一化していったという報告[4]があります。つまり、中国の図説百科事典に記載される対外情報は、こののち19世紀の終わりまで、アップデートされていなかったことになります。

それを示すように、情報更新がないままの中国の『三才図絵』には、「日本国」は、古く7世紀～9世紀にかけて、遣隋使・遣唐使として中国を訪れていた留学僧の姿で描かれます。次頁に図5として、『三才図絵』から「日本国」の絵をあげます。長衣をまとい、靴をはき、衣の中に手を隠している姿です。歴史上、日本から中国を訪れる人物は、確かに僧

が多いですが、イメージが古過ぎることに違和感を抱きます。鎖国政策をとっていた当時の日本の情報収集が難しかったことを差し引いても、中国側の対外情報の偏りは、間違いのない事実でしょう。

先にあげた「琉球国」の情報更新が行われていないことと合わせて考えると、ほぼ同じ頃、鎖国政策をとっていたはずの日本が、50年ほどの間に新たな情報を取り入れ、「琉球国」に対するイメージを刷新したのに対し、中国の「日本国」「琉球国」へのイメージは、あまりにも固定化してしまっています。

では、一方で、日本は当時の自国を、どのように意識していたのでしょうか。『異国物語』に掲載されている「大日本国」[5]の絵を、図6として、先ほどの図5と並べて掲載します。

図5『三才図絵』「日本国」

図6『異国物語』「大日本国」

いかがでしょうか。遣隋使・遣唐使の時代は遠く去り、すでに支配層が貴族から武家へと変化した日本は、徳川将軍のもとに統一された武士の国であるという自意識を明確に持っていたことが、図6からわかります。図5・図6が、同じ日本を代表するイメージであることを考えると、その大きな隔たりに愕然とします。鎖国政策をとっていた日本ですが、江戸時代を通じて、必要な情報は更新し、限られた範囲であっても異国への好奇心を忘れなかったことが挿絵から推察できます。

## 5. おわりに

当時の人々の目線で「挿絵を解釈する」と、それまで見えていなかった新しい世界が開けます。たとえそれが誤った認識を含んでいても、江戸時代の人々の考え方を知ることで、今の我々が無意識下に持っている概念がどこから生まれたのか、そのルーツを探ることができます。

挿絵解釈の面白さを、わずかでもお伝えすることができたでしょうか。拙文を機会に、少しでも挿絵に興味を持っていただけたなら、望外の喜びです。

---

注記

[1]『異国物語』国立国会図書館デジタルコレクション（申－8）「インターネット公開（保護期間満了）」から転載。

[2]『三才図絵』国立公文書館内閣文庫蔵（367－17）「人物十三巻」。

[3]『和漢三才図絵』（株式会社大空社　CD－ROM　2枚組）から転載。

[4] 田中健夫『東アジア通交圏と国際認識』（吉川弘文館　1997年）。

[5]「日本国」ではなく、「大日本国」と記載。自国への矜持として「大」をつけたと考える。